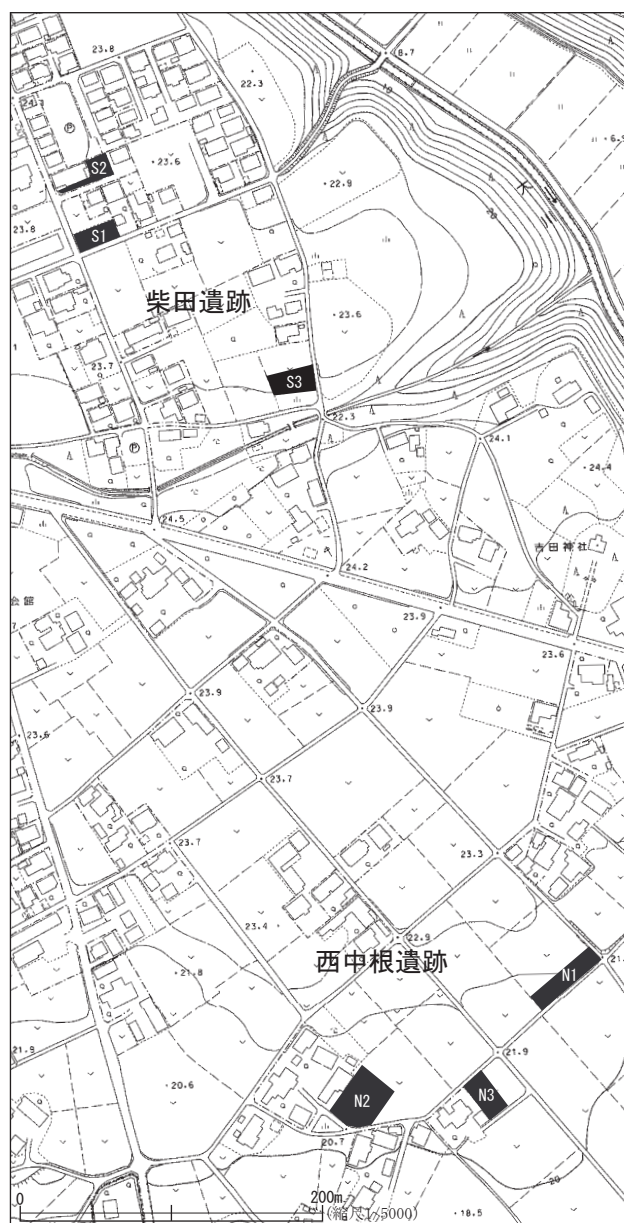


IV 柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利E式」の集落跡について

1 はじめに

ひたちなか市域は、縄文時代の集落跡の全体が対象となるような大規模な発掘調査を経験していない。縄文時代中期「加曽利E式」の遺跡では、三反田蜆塚貝塚と君ヶ台遺跡が古くから知られていた。1960年代までは学術調査、1960年代からは開発に伴う小規模な発掘調査が、他の遺跡にも繰り返されてきた。本稿では、個人住宅建



第59図 柴田遺跡と西中根遺跡の調査区

設に対応する部分的な発掘調査が3次を数えた柴田遺跡について、「加曽利E式」の集落跡としての知見を概括し、周辺に位置する遺跡との比較を進めておきたい。

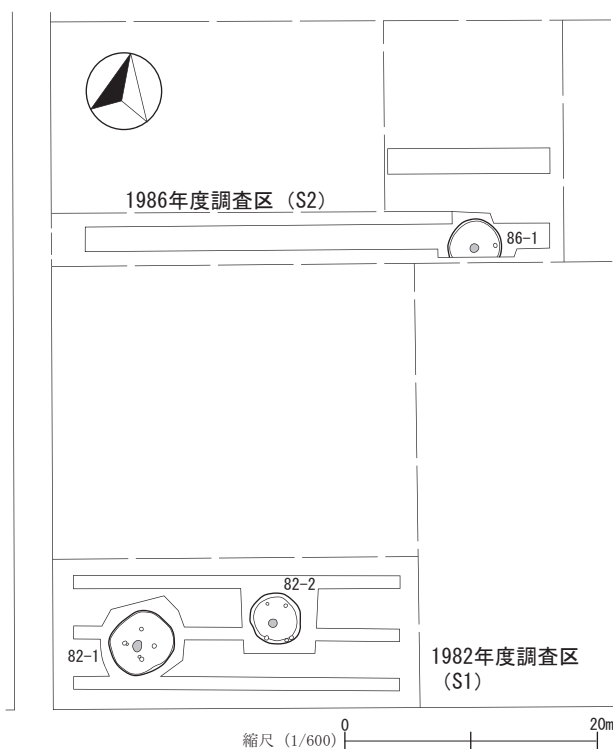
2 集落跡としての柴田遺跡

柴田遺跡は、中丸川支流の大川を望む台地上に形成された遺跡であり、1981年の分布調査で発見された。「遺物の散布はきわめて少なくまばらに縄文時代中期の土器片がみられたにすぎない」[住谷他1983]という状況が記録されている。

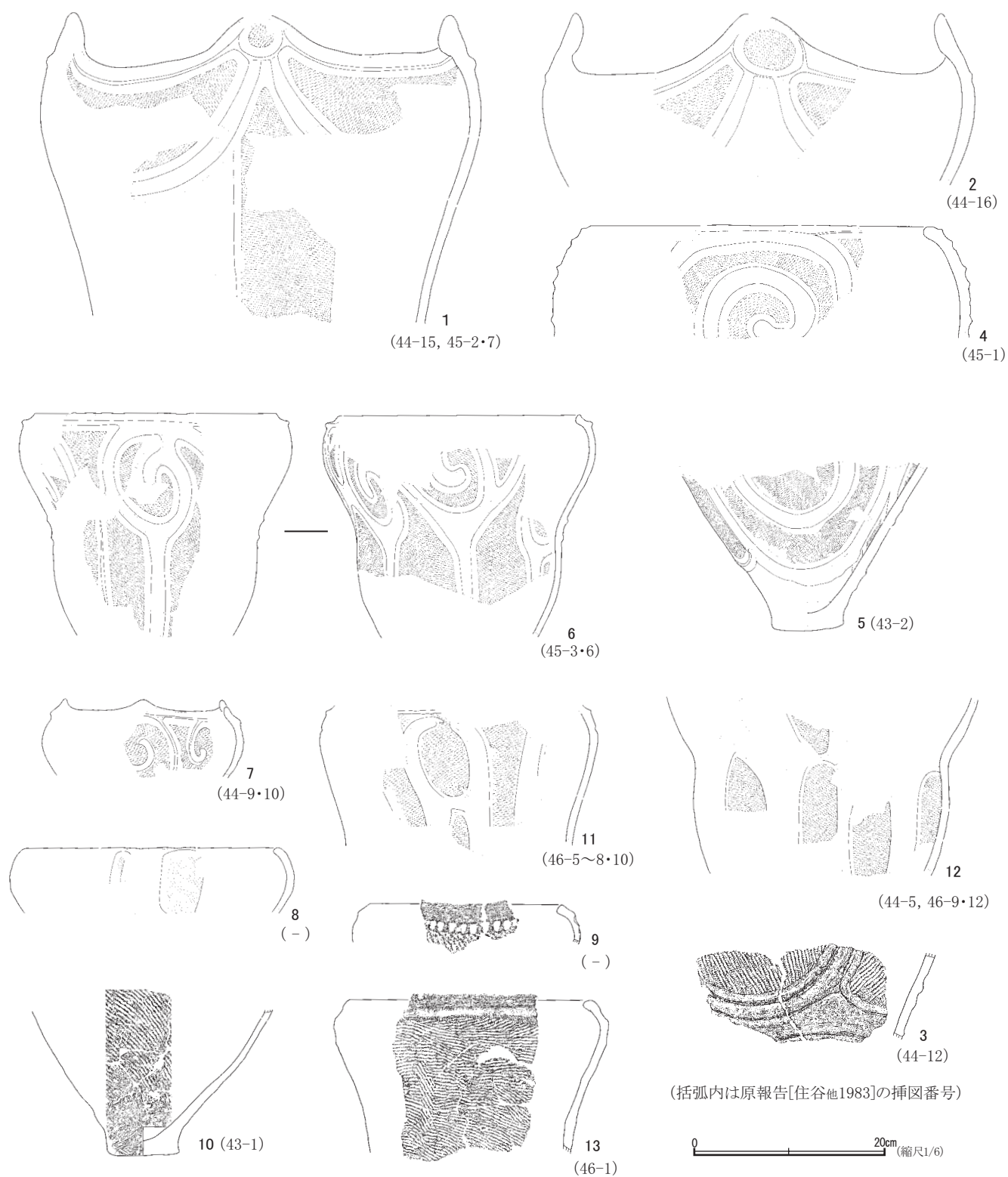
第1次調査は、1982年度に実施された(第59図S1)。調査の結果、住居跡が2基検出されている。2基の住居跡は、6mほどの距離にある(第60図)。

82-第1号住居址は、平面が4.8m×5.25mの楕円形を呈する。残存する壁高は28cmほど。炉址は地床炉である。ピットが6基検出され、4本主柱の構造で建て替えられたことが推定されている。出土した土器(第61図1～11)は、炉址内(2)、床面(3～5,6の一部,10)、覆土(1,6の一部,7～9,11)に分けて報告された。

82-第2号住居址は、平面が3.95m×4.3mの楕円形を呈する。残存する壁高は40cmほどで、壁周溝が全周する。炉址は地床炉。ピットが6基検出され、2本主柱の構造が推定されている。土器(第61図11～13)は、



第60図 柴田遺跡第1・2次調査の遺構



第 61 図 柴田遺跡第 1 次調査出土土器 (1 ~ 10 : 1 住, 11 : 1 住及び 2 住, 12・13 : 2 住)

全て覆土から出土した。

第 2 次調査は、1986 年度に実施された (第 59 図 S 2)。調査の結果、住居跡が 1 基検出されている。第 1 次調査で検出された 82- 第 2 号住居址とは、30 m ほどの距離がある (第 60 図)。

86- 第 1 号住居址は、平面が直径 4.35 m ほどの円形

と推定される。壁高は 28cm ほど。炉址は地床炉である。ピットが 1 基検出されたが、支柱の構造は明らかでない。「覆土などから縄文式土器片が 20 片ほどみられたにすぎない」[住谷他 1987] という。

第 1 次及び第 2 次調査は、対象地が近接し、検出された 3 基は、いずれも「加曽利 E 3 式」の時期の住居跡で

あった。住居跡は、重複せずに形成されているが、82-第1号の覆土中には、多量の土器片が廃棄されており、82-第1号と第2号の覆土に同一個体の土器の廃棄が認められることから、形成された住居跡の全てが同時に集落を構成したのではなく、集落跡は時間的に分解されると考えられる。

2013年度に実施した第3次調査は、第1・2次調査より南東方向に150mほど離れた地点が対象であり、住居跡と推定される遺構を確認したが、その時期は「加曽利E4式」に位置付けられるものであった。この調査区には、「加曽利E3式」の分布は見られない。つまり、柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利E式」の集落跡は、「加曽利E3式」と「4式」とで、地点を変えて形成されていることが明らかになった。

「加曽利E3式」と「4式」の集落跡が形成された、その空間の総和が柴田遺跡という範囲で括られている。この範囲には、現在まで、貝塚は確認されていない。「加曽利E4式」の第3次調査区には、土器片錘が見られた。

3 柴田遺跡第1次調査区の土器群

柴田遺跡の第1次調査で出土した遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。

第61図1～5・10は大型、6・8・11～13は中型、7・9は小型の深鉢形土器である。文様の属性により、大きく4つに分類して解説する。

1類（第61図1～3） 口縁部と胴部とに区分される文様構成の土器であり、2・3類とは、文様構成が大きく異なる。1・2は波状口縁、2の波頂部は4つと推定された。頸部は括れが小さい。区画文は隆帯であり、上縁は1条、胴部との境界は2条を単位とする。隆帯は両側が窪むように調整され、2条の隆帯は断面が扁平なM字状を呈する。口縁部文様は、波状口縁の波頂部に円形、波頂部間に三日月形に区画された縄文を配置する。太い沈線による渦状文は見られない。胴部文様は、沈線で区画された幅の広い縄文帯と無文帯を交互に配置する。3は、口縁部と胴部の間に無文部を設けて、胴部文様の上端を水平にしている。

2類（第61図4～7） 隆帯で体部に文様を構成する土器である。隆帯には1条と2条の単位があり、1類と特徴を同じくする。文様の形象は渦状文を基本としてお

り、小川和博は、この類を「隆起帯入組渦巻文土器」〔小川1991〕と呼んでいる。口縁には、緩やかな波状と平縁があり、頸部は括れが大きい。渦状文は、括れより上位に配置されるが、5のように下位にも渦状文を配置するもの、6のように懸垂文へと接続するもの等がある。

3類（第61図8・11・12） 沈線区画された縄文帯で体部に文様を構成する土器である。口縁には平縁があり、頸部は括れの大きなものと小さなものがある。括れより上位には楕円形、下位には逆U字状の区画文が配置されている。11の区画文の形象には、「加曽利E4式」への連絡が窺える。

4類（第61図9・10・13） 縄文のみが体部に施文された土器である。口縁には平縁があり、頸部には括れの小さなものがある。9・13は、隆帯で区画された口縁部に無文帯が形成されており、9の隆帯下には刺突文が施されている。10の底部は、2類の5とともに、突出したような形状に成形され、全体の法量に対して底径が小さい。

82-第1号住居址においては、床面から1・2・4類が、覆土から1～4類が出土した。覆土の1類1は、図示した以外にも同一個体の破片が比較的多量に出土している。調査された覆土の堆積は28cmほどであり、本稿では、1～4類の土器群を同一時期のものと捉えて、比較のための定点としたい。特に、2条を単位とした隆帯の2類が、この時期の表徴となろう。86-第1号住居址の覆土にも、2類の破片が含まれている。

4 柴田遺跡と西中根遺跡

西中根遺跡は、柴田遺跡と同じ台地上にあり、県道水戸馬渡線より南側の広い範囲が相当する。1930年代から知られていた遺跡であり、「時期は縄文中期（阿玉台^{註1}～加曽利E）から後期（堀之内I式）にかけて形成されたものであり、遺跡の規模、保存状態から言って現在では勝田市内で最大規模の遺跡」〔川崎他1975〕と記録されたが、その内容は、ほとんど報告されてこなかった。1992年度から現在まで3次の調査が実施されている。第2次〔鴨志田1993〕及び第3次〔佐々木編2012〕の調査区からは、遺物は出土しても、縄文時代の遺構は検出されていない（第59図N2・N3）。

1992年度に実施された第1次調査では、縄文時代と



第 62 図 西中根遺跡第 1 次調査出土土器

確実に考えられる遺構が 2 基検出されている。1 基は、「第Ⅲ区第 1 遺構」として報告された粘土採掘坑である。湧水等を理由に、調査は下底面に及ぶことなく終了されており、掘削の時期は明確でない。埋没の時期についても、報告書に記載がないので、遺構に伴う土器の特定など、今後に再検討が必要である。もう 1 基は、「第Ⅲ区 P 2」として図示された土坑であり、覆土の上部から「縄文式土器が直立した状態で出土した」という。この土器は、器内面側からの加撃により底部が穿孔されており、出土状況からも土器棺と考えられるものである。つまり、この調査区には、住居跡は検出されず、粘土採掘坑という、おそらくは土器の原料を採掘したと推定される痕跡と、土器棺墓という埋葬の施設が形成されていた。土器棺について、これを新たに実測して再報告する。

土器棺（第 62 図 1）は、口縁部を全く欠き、体部も上部の大半を欠損する。これは、正位の状態にあって、上位を耕作により攪乱されたことによるであろう。大型で、頸部の括れが大きい形態である。体部には、2 条を単位とした隆帯で渦状文が構成されており、柴田遺跡における「加曽利 E 3 式」の 2 類に相当する。括れより下位にも渦状文が配置され、底部付近は懸垂文に接続している。炭化物の付着と変色から、煮沸具として使用されていたことが推定され、それが土器棺に転用された。器外面の変色等の状態は 4 層に分かれ、底部から 9.5cm までの底



上部検出状況

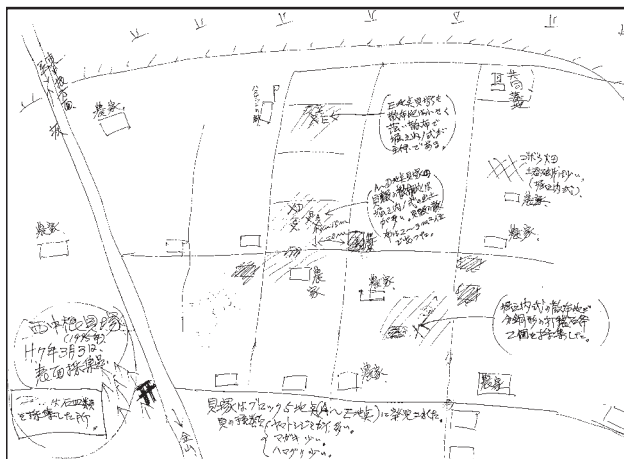


下部検出状況

部付近は暗褐色、23cm までの下部は淡褐色を基調として赤化、括れの周辺に相当する 46cm までは煤状の炭化物が付着、それより上部は淡褐～褐色を呈している。底部付近に赤化が認められないのは、底径が小さく不安定な底部を埋め込むように固定したことが想定された。柴田遺跡の 3 基の住居跡に見られた地床炉の窪みは、このような土器を固定するためにも利用されていたのであろう。

第 1 次調査では、「加曽利 E 4 式」も出土しており、この周囲に「加曽利 E 3 式」と「4 式」の集落跡が形成されていたことは、ほぼ確実に推定される。しかも、「加曽利 E 3 式」については、柴田遺跡と同時期に形成された集落が含まれていることになる。隣接した遺跡に同時期の集落が推定されたわけではあるが、柴田遺跡の状況からは、これを大規模な 1 つの集落跡と捉えることはできそうにない。

西中根遺跡には、台地上に地点貝塚の存在が報告されているが〔川崎他 1975, 住谷 1982, 藤本・鈴木 1994〕, その形成時期は、藤本武による踏査では、重複する縄文時代後期「堀之内 1 式」であるらしい（第 63 図）。「加曽利 E 式」の時期には、少なくとも規模の大きな貝塚の形成は見られない。第 1 次調査では、礫石錘と土器片錘が出土している。土器片錘は、後期の土器を利用したものであった。



第 63 図 藤本武による西中根貝塚のメモ（左下方向が概略の北）

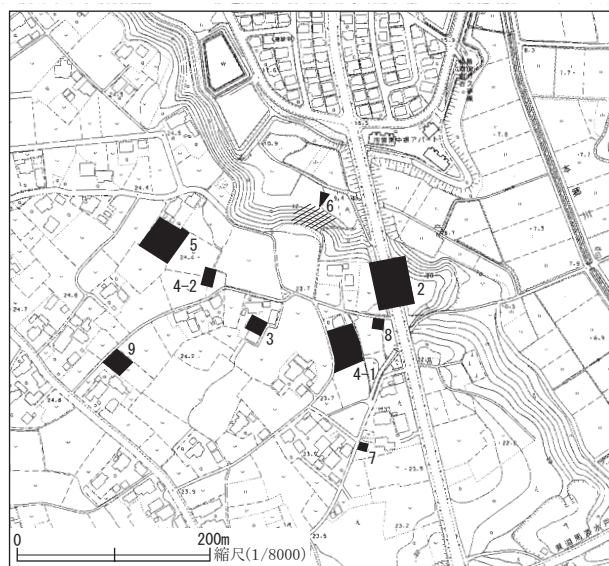
5 柴田遺跡と君ヶ台貝塚

君ヶ台貝塚は、中丸川支流の本郷川を望む台地上に形成された遺跡である。柴田・西中根遺跡との距離は 1km 余であるが、台地は大川で隔てられている。1951 年に、甲野勇を招いた勝田町郷土史編纂委員会が学術調査を実施しており、これが第 1 次調査に相当する。遺構配置図のみが公表されており [伊東・川崎 1966]、調査地点は明らかでない。小竪穴遺構と溝状遺構が検出されたらしいが、出土遺物も報告されないままになった。第 2 次調査は、道路建設に伴う発掘調査であり、住居跡 2 基の他に小竪穴遺構、土坑が検出されている。2 基の住居跡は、3 号住居址が「加曽利 E 3 式」、4 号住居址が「加曽利 E 4 式」であった。第 3～7・9 次調査は、市内遺跡の調査である。1994 年度の第 3 次調査 [鴨志田他 1995] では 2 基の住居跡など、2001 年度の第 5 次調査 [鴨志田他 2002] でも 2 基の住居跡などが検出されたが、その時期について報告書に記載がなく、遺構に伴う土器の特定など、今後に再検討が必要である。2003 年度の第 6 次調査 [鴨志田 2004] は、未周知であった斜面部から、建設工事に伴い貝層が露出したため、その記録を目的に実施された。2006 年度の第 8 次調査は、鉄塔建設に伴う発掘調査であり、1 基の住居跡が検出された。時期は「加曽利 E 2 式」。この調査も未だ報告されないままである。第 4・7・9 次調査では、縄文時代の遺構は検出されていない。（第 64 図 地点番号は調査次数に一致する）

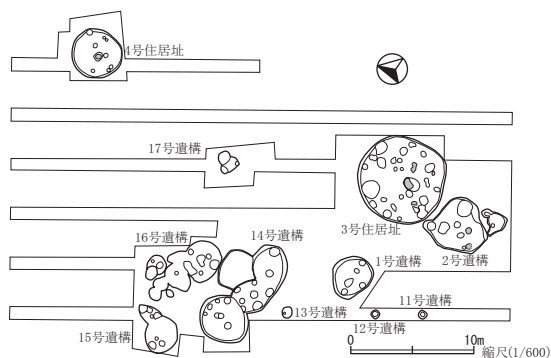
現在のところ、君ヶ台貝塚における既往の調査全てを再検討して総括するには至っていない。第 2 次調査の一部、4 号住居址については既に再検討を報告してあるの

で [鈴木 2007]、本稿では、これに加えて同調査の 1 号遺構及び 3 号住居址の遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。

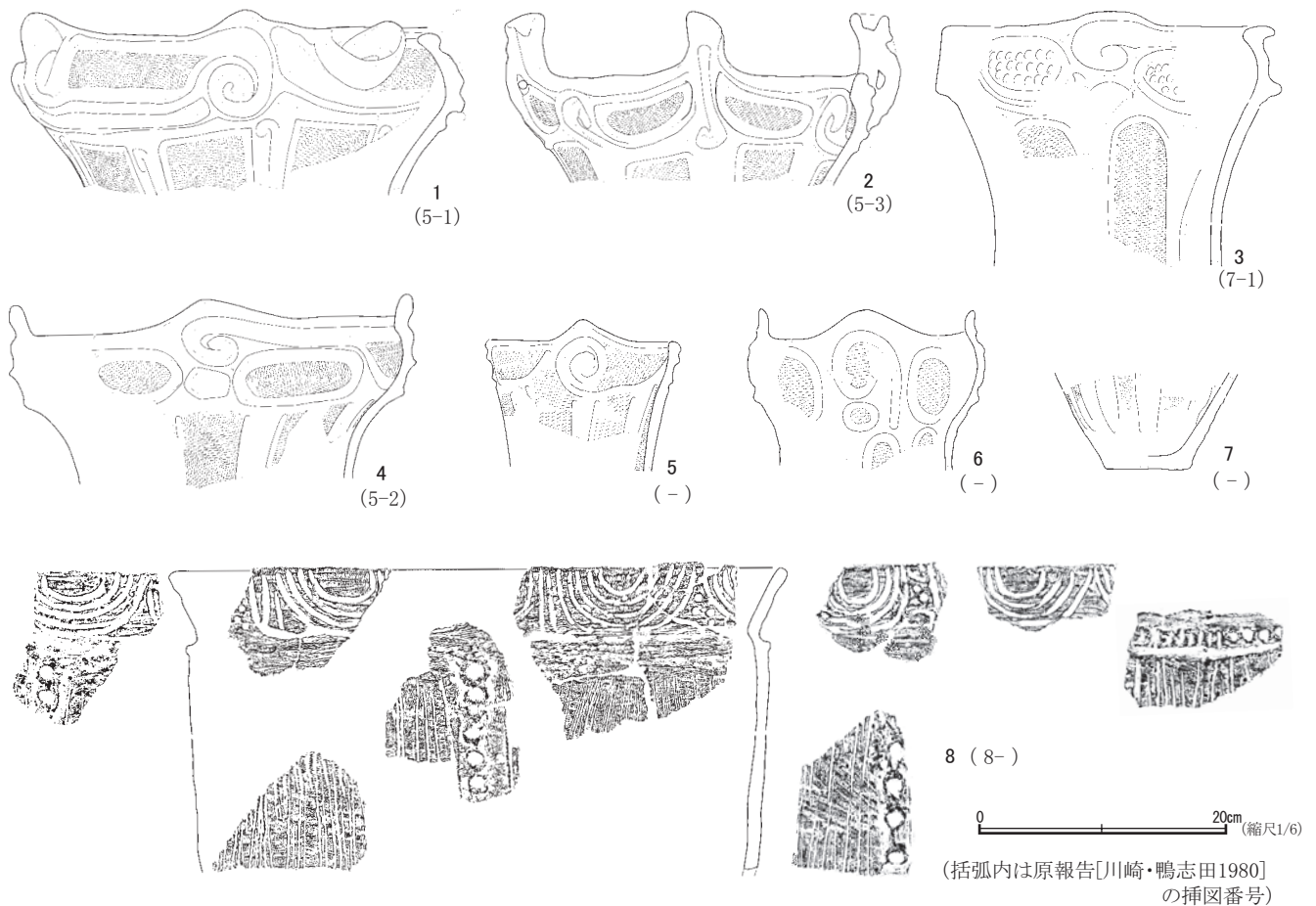
1 号遺構・3 号住居址の土器群 1 号遺構は、平面が $3.6\text{ m} \times 3.2\text{ m}$ の楕円形を呈し、床面に柱穴状のピットを有した小竪穴遺構である。炉址は検出されていない。遺物は、覆土中位の層中に集中し、床面から 30cm 以上も浮いて出土した。つまり、遺構が廃絶された後に、その埋没の途中で廃棄されたものと捉えられる。一方の 3 号住居址は、平面が $7.1\text{ m} \times 6.8\text{ m}$ の楕円形を呈した大型の住居跡である。炉址は地床炉。底部を欠く大型の深鉢形土器（第 67 図 1）が床面に埋設されていた。1 号遺構と 3 号住居址の距離は 3 m 余であり、1 号遺構の覆土へと遺物を廃棄した主体者が 3 号住居址に想定できる位置関係にある（第 65 図）。3 号住居址の覆土からは、「加曽利 E 4 式」（第 67 図 5～7）も出土しており、これは、4 号住居址もしくは周囲の未調査区に廃棄の主体者を想定すべきことになる。



第 64 図 君ヶ台貝塚の調査区



第 65 図 君ヶ台貝塚第 2 次調査の遺構



第 66 図 君ヶ台貝塚第 2 次調査 1 号遺構出土土器

第 66 図 8, 第 67 図 1・4 は大型, 第 66 図 1 ~ 4・7, 第 67 図 2・3 は中型, 第 66 図 5・6 は小型の深鉢形土器である。文様の属性により, 大きく 5 つに分類して解説する。

1 類 (第 66 図 1 ~ 5・7, 第 67 図 1) 口縁部と胴部とに区分される文様構成の土器である。頸部の括れが小さいもの, 大きいもの, ほとんど括れないものがあり, これらの形態が大型, 中型, 小型の法量に, それぞれ対応している。口縁部文様は, 渦状文と区画文で構成され, 中型で括れの大きい形態には, 突起や橋状の把手を造形するなど口縁部に立体的な装飾が加えられている。波状口縁の波頂部下には, 渦状文を配置する構成が典型である。区画文内は, 縄文の施文を典型とするが, 刺突文の充填も見られる。胴部文様は, 沈線で区画された縄文帯と無文帯を交互に配置する。縄文帯の上部にも沈線が施文されて, 逆 U 字状の区画文となるもの, 無文帯に蕨手状の懸垂文が加えられたものもある。

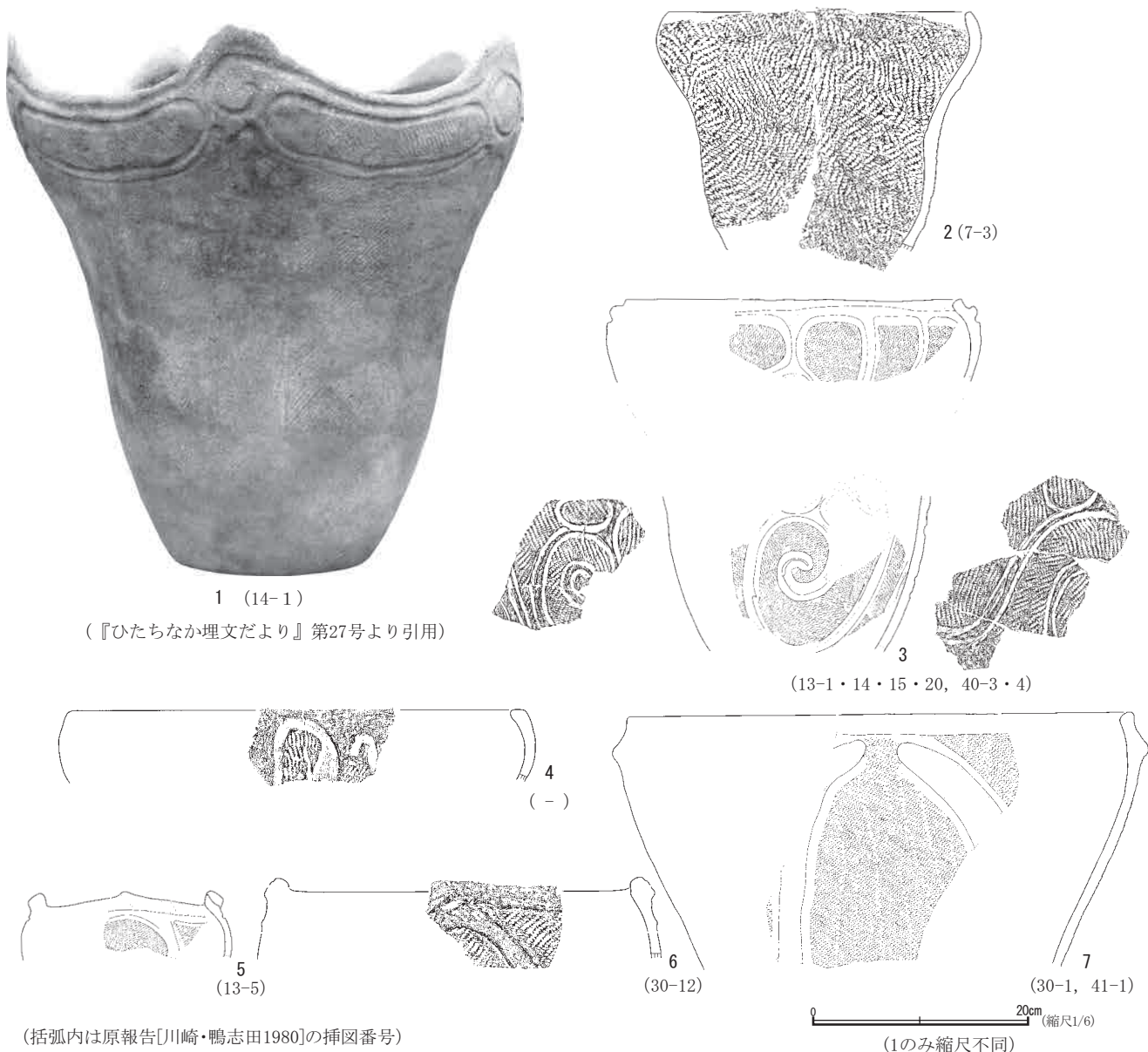
2 類 (第 67 図 3) 隆帯で体部に文様を構成する土器であり, 隆帯は 1 条であるらしい。3 は, 口縁が平縁で

あり, 頸部の括れは大きいと推定される。括れより下位は, 隆帯でなく, 隆帯に相当する幅を沈線区画した無文帯により渦状文が構成されている。

3 類 (第 66 図 6, 第 67 図 4) 沈線区画された縄文帯で体部に文様を構成する土器である。口縁には波状と平縁があり, 頸部の括れは大きいと推定される。6 の括れより上位には楕円形, 下位には逆 U 字状の区画文が配置されている。縄文を囲む縦位の渦状文には, 「大木 9 式」との連絡を窺うことができる。4 には, 蕨手状の懸垂文が加えられている。

4 類 (第 67 図 2) 縄文のみが体部に施文された土器である。2 は, 口縁が平縁であり, 頸部の括れは大きい。縄文は口唇部直下から施文されており, 無文帯は形成されない。

5 類 (第 66 図 8) 口縁部と胴部が隆帯で区画され, 外反する口縁部には重弧文, 直線的な胴部には条線文が施されている。この形態と文様が 1 ~ 4 類とは明確に異なる。「曾利式」の所謂「籠目文土器」と連絡した変遷が推定される土器である。

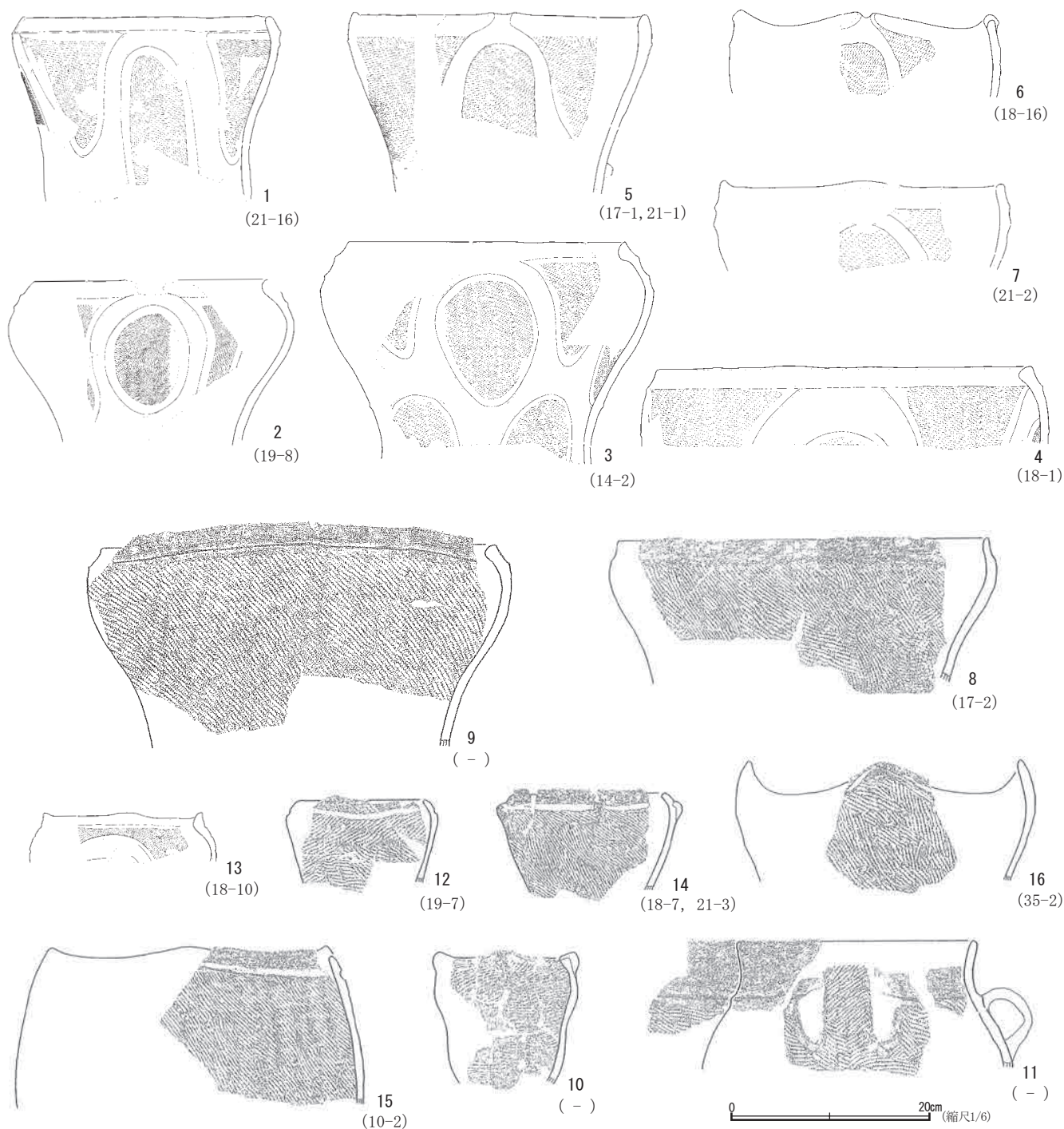


第 67 図 君ヶ台貝塚第 2 次調査 3 号住居址出土土器

君ヶ台貝塚と柴田遺跡の「加曽利 E 3 式」を比較してみると、まず、1～3 類のうち、君ヶ台貝塚では 1 類を主体とするのに対して、柴田遺跡では、2・3 類が主体となっている。1 類の口縁部文様は、君ヶ台貝塚は渦状文と区画文が組合う構成であるのに対して、柴田遺跡は区画文のみで構成されている。つまり、太い沈線で描出された渦状文が姿を消す。また、立体的な装飾や区画内を充填する刺突文も、柴田遺跡には見られない。大型どうしを比較してみると、君ヶ台貝塚 3 号住居址（第 67 図 1）の波頂部下の渦状文が、柴田遺跡 82- 第 1 号住居址（第 61 図 1・2）の円形区画文へと変遷したことがよく理解できる。軌を一にするように、胴部文様では、蕨手状の沈線文が姿を消している。2 類の隆帯は、君ヶ台

貝塚が 1 条で、しかも下部は沈線区画の無文帯であるのに対して、柴田遺跡は 2 条単位を典型としている。3 類については、文様形象を比較できるほど資料が充実していない。4 類は、柴田遺跡が口縁部に無文帯を形成しており、これが柴田遺跡の 1～4 類に共通した特徴となっている。5 類は、君ヶ台貝塚にのみ見られる。底部の形状の変化も含めて、これらの異なりから、君ヶ台貝塚の「加曽利 E 3 式」を「古段階」、柴田遺跡の「加曽利 E 3 式」を「新段階」と位置付けておきたい。

4 号住居址・3 号住居址の土器群 4 号住居址は、平面が 4.1 m×3.9 m の略円形を呈した住居跡である。炉址は、半環状に検出された粘土の存在から、土器埋設炉であった可能性が考えられる。住居跡の廃絶時期は、炉



第68図 君ヶ台貝塚第2次調査4号住居址出土土器

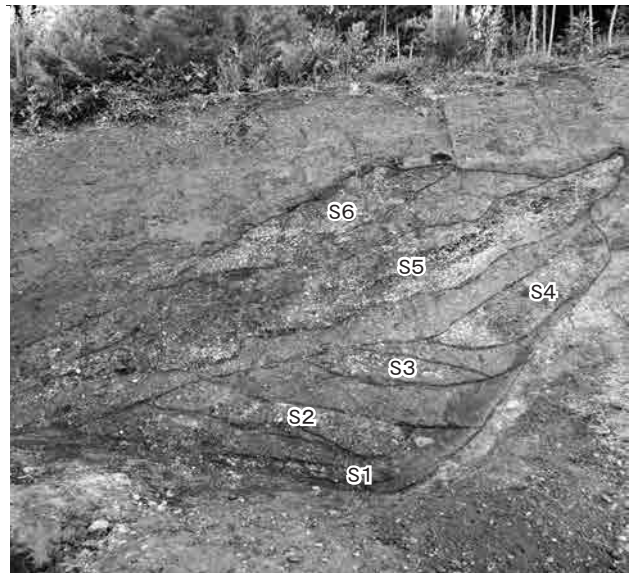
址内から出土した土器により、「加曽利E 4 式」と捉えられた。覆土中に地点貝塚が形成されており、貝層の下端は、床面から20cmほど浮いている。この貝層を含む覆土「第2層」中から、土器が集中して出土した。

4号住居址から出土した土器には、「加曽利E 3 式」の破片(第68図16)も混在するが、「加曽利E 4 式」の土器群がまとまる。那珂川下流域における「加曽利E 4 式」については、水戸市砂川遺跡〔渡辺1982〕の第33号住居跡の土器群を「古段階」、水戸市十万原遺跡〔皆

川2001〕の第550B号土坑の土器群を「新段階」とした基準を提示してある〔鈴木2007〕。「古段階」においては、頸部の括れが小さく、胴上部の略三角形と胴下部に及ぶ長楕円形もしくは逆U字形を交互に配置する文様構成の土器(第68図1・4, 第67図6・7)を「君ヶ台類型」、頸部の括れが大きく、胴上部に略三角形と楕円形を交互に配置する土器(第68図2・3)を「砂川類型」と呼んで、細別の表徴とした。「新段階」については、口縁部の無文部が途切れて、胴部の文様が口唇部へと突き抜

ける形象（第 68 図 5～7）を「岩坪類型」と呼んでいる。「古段階」の「君ヶ台類型」は、「加曽利 E 3 式新段階」の柴田遺跡 1 類からの変遷が推定される。これは、「岩坪類型」へと変遷を遂げる系列である。また、「砂川類型」には、柴田遺跡 2 類からの変遷が推定されよう。渦状文から楕円形の区画文への変化には、施文工程を省略する「潜在文様の現出」[鈴木 1998] を想定しておきたい。これらの類型は、隆帯から変化した隆起線で文様が描出されるが、沈線により文様が描出された土器（第 68 図 13, 第 67 図 5）も、これに伴う。縄文のみが体部に施文された土器には、口縁部の無文帯が隆起線で区画されるもの（第 68 図 8・9）と、沈線で区画されるもの（第 68 図 12・14・15）が見られる。

第 2 次調査では、君ヶ台貝塚における小規模な地点貝塚の形成が確認され、それは「加曽利 E 3 式古段階」と「4 式古段階」の時期に相当していた。全てヤマトシジミを主体とした貝層の堆積である。調査区内からは、土器片錘と礫石錘が多量に出土し、3 号及び 4 号住居址の覆土からもそれぞれが検出されている。また、4 号住居址内の貝層中からは、ハマグリ^{註3}の貝殻を素材とした貝刃が 2 点出土し、僅かながら魚骨片も含まれていた。その後 2003 年に、斜面貝塚が発見されて、第 6 次調査が実施されることになる。谷部を埋めるように堆積した貝層が、東西の幅約 6 m、高さ約 4.5 m で露出していた。貝層は、さらに削平面の下へも連続している。露出面の観察では、貝層 1（第 69 図 S1）から貝層 3（S3）までがほぼ水平に堆積した後、地崩れであろうか、これらの堆積の東側（左側）が消失し、貝層 4（S4）から貝層 6（S6）までが急傾斜に堆積した。それぞれの貝層の間には、混貝土層が堆積している。全てヤマトシジミを主体とした貝層であり、他に 23 種の貝類、ウニ類、フジツボ類が報告された。現地では、魚骨、獣骨が含まれていることも確認している。出土位置を記録して採取された土器の報告からは、貝層 1～3 の貝層群が「加曽利 E 2 式」、貝層 4～6 の貝層群が「加曽利 E 3 式古段階」に形成されたものと推定される。「加曽利 E 2 式」には、第 7 次調査が検出した住居跡、「加曽利 E 3 式古段階」には第 2 次調査の 3 号住居址が対応し、規模の大きな貝塚が、集落に伴い形成されたことを確認できる。



第 69 図 君ヶ台貝塚第 6 次調査の貝層

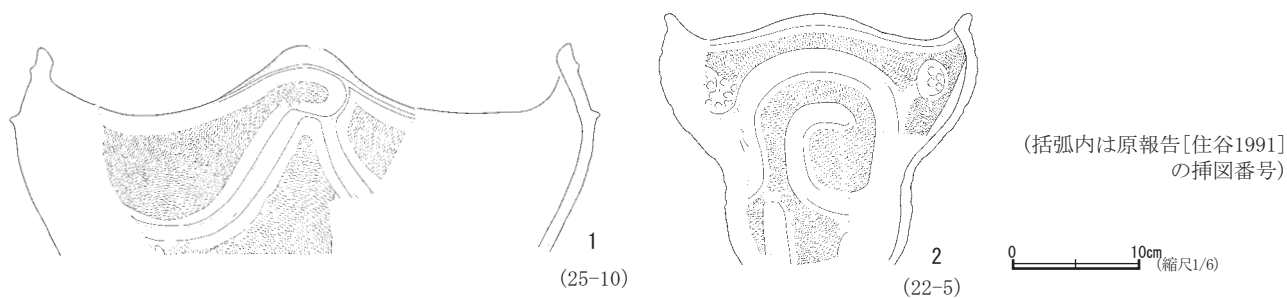
6 中丸川流域における遺跡群の検討に向けて

柴田遺跡を起点とした比較は、今後、三反田蜆塚貝塚、上の内貝塚をも対象として、中丸川流域における縄文時代中期後葉の遺跡群の形成へと検討を進めることになる。本稿では、君ヶ台貝塚の「加曽利 E 3 式古段階」、柴田・西中根遺跡の「加曽利 E 3 式新段階」、君ヶ台貝塚の「加曽利 E 4 式古段階」という序列を確認し、大規模な貝層の形成は、「加曽利 E 2 式」から「3 式古段階」までの期間に限定されることを捉えた。土器群の序列が、遺跡間を行き来したように、柴田・西中根遺跡と君ヶ台貝塚は、集落跡としても補完の関係にあったのかもしれない。

三反田蜆塚貝塚の調査のうち、1990 年度の第 9 次調査[住谷 1991]で出土した土器については、本稿に掲載しておくことにしよう。90-第 1 号住居跡の覆土から出土した「加曽利 E 3 式」である。第 70 図 1・2 の土器は、「古段階」と「新段階」の属性を有しており、両段階の中間に位置付けられる。遺跡群の形成が、集落の軌跡として解読される可能性を、ここにも見るのである。

註 1 「1935 年頃から藤本弥城と筆者（引用註：藤本武）が調査を行ってきた所である」[藤本・鈴木 1994]と記載されている。

註 2 西中根遺跡として報告された資料に土偶の破片[鴨志田 1972]があるが、これは縄文時代後期である。『勝田市史』[川崎他 1979]に掲載された「中根遺跡出土石器」は、西中根遺跡の採集品かもしれないが、確認できていない。



第 70 図 三反田蜆塚貝塚第 9 次調査第 1 号住居跡出土土器

註 3 「魚骨と獣骨は含まれていない」[川崎・鴨志田 1980] と報告されていたが、貝層サンプルを再検討した結果、魚骨を認めた。

参考文献

石井 篤 2007 『平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 7 次調査）

伊東重敏・川崎純徳 1966 『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会

小川和博 1991 『平原 B 貝塚 一茨城県那珂郡東海村縄文貝塚の調査一』東海村教育委員会

鴨志田篤二 1972 「西中根遺跡」『縄文時代土偶・土版・岩偶・岩版・資料（その 1）』常総台地研究会資料（1）常総台地研究会 17-18 頁

鴨志田篤二 1993 『平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会（西中根遺跡第 1 次調査）

鴨志田篤二他 1995 『平成 6 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 3 次調査）

鴨志田篤二他 1999 『平成 10 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 4 次調査）

鴨志田篤二他 2000 『平成 11 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（西中根遺跡第 2 次調査）

鴨志田篤二 2002 『平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 5 次調査）

鴨志田篤二 2004 『平成 15 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 6 次調査）

川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第 1 集 勝田市教育委員会

川崎純徳他 1979 『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市

川崎純徳・鴨志田篤二 1980 『君ヶ台貝塚の研究』勝田文化研究会（君ヶ台貝塚第 2 次調査）

佐々木義則編 2011 『平成 22 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台貝塚第 9 次調査）

佐々木義則編 2012 『平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（西中根遺跡第 3 次調査）

鈴木素行 1994 「西中根遺跡」『フィールドノート』vol.6 14 頁

鈴木素行 1998 「泉原貝塚における土器群の編年と系統 一土器に関する問題・Ⅱ」『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第 45 集 日立市教育委員会 24-55 頁

鈴木素行 2007 「向野 E 遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について 一君ヶ台貝塚の再検討を添えて一」『向野遺跡群』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 36 集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 235-254 頁

住谷光男 1982 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和 56 年度版』勝田市教育委員会

住谷光男他 1983 『昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会（柴田遺跡第 1 次調査）

住谷光男他 1987 『昭和 61 年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会（柴田遺跡第 2 次調査）

住谷光男 1991 『平成 2 年度勝田市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会（三反田蜆塚貝塚第 10 次調査）

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2007 『ひたちなか埋文だより』第 27 号

藤本 武・鈴木素行 1994 『久慈川・那珂川流域の貝塚 一藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅷ一』（財）勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 10 集 財団法人勝田市文化・スポーツ振興公社

皆川 修 2001 『十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第 179 集 財団法人茨城県教育財団

渡辺俊夫 1982 「砂川遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 4 宮部遺跡 鹿の子 A 遺跡 砂川遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅵ 財団法人茨城県教育財団